【六月十七日附朝日新聞「声欄」】

勇気をもつて立ちあがろう

加藤シヅエ

六月十五日の全学連の暴行は、日本国民の心をしんがいさせずにはおかなかつた。わたしは、テレビでその経過を見ながら、この国の将来を考えて、胸もつぶれる思いであつた。

この期におよんで、警察がやりすぎたとか、政府の責任であるとかいうのはとんでもない見当ちがいである。これは、一部の破壊的イデオロギーによつて動かされる少数者が、暴力をもつて政府を転覆しようとする、きわめて危険な意図によるものである。

わたしは、社会党員としてすでに十年以上、国会に籍をおくものであるが、日本の民主主義がこのような暴行によつて破壊の危機にさらされるようになつたことを、深く恥じるものである。

また、わたしはこの数週間、自分のおく病さのゆえに、心に正しいと思つたことをはつきりと表現しなかつたことを国民の前に陳謝したい。両院議員総会などでも間違つた決定がなされても、黙つて聞きすごしていた。また、正しいことを勇気をもつて発言するものがいても、立ちあがつてこれを支持することをしなかつた。他人の思惑、党内の批判を恐れる心のゆえであつた。

しかし、いま、わたくしは、日本を共産主義から守り、正しい民主主義を打ち立てるために、全面的に戦うことを誓うものである。

五月十九日以来、日本は共産主義と民主主義の決戦場と化した。共産主義は、中共その他の積極的な支援のもとに人民戦線を結成しその圧力をもつて、内閣を破壊しようと努力し、さらに、反米暴動を誘発して、日米の離間を策している。

安保条約改定の当否、岸首相個人のとつた処置の可否などは、すでに問題の焦点をはるかに離れてしまつている。

真の問題は、いつたいわれわれは、われわれ自身のために、また子どもたちのために、どのようなイデオロギーのもとに日本を作ろうとしているのか、である。

日本は、米国に追随すべき国でないことは、もちろんである。しかし同時に、中共やソ連の圧力によつて支配さるべき国でもない。

もし、われわれがいま、勇気をもつて立ちあがり、心に思つている真実をはつきりと口にし戦う決意をするならば、まだわれわれは、日本およびアジアを救うことができると、信ずるものである。